立教大学アジア地域研究所主催 国際シンポジウム

東アジア文化圏の芸態にみる「大衆」

～観念・実体・空間～

東アジア各国・地域で「大衆」を享受者とする芸態の近代化による変容について、各国・地域の事例を単純に比較研究するのではなく、東アジア文化圏という枠組の中で位置づけていく過程で、東アジア各国・地域における「大衆」という語が示す観念、実際にどのような人々をさすのかは一様ではないこと、また各国・地域でも近 40 年の間で変化が認められることが明らかになった。更にはメディアの多様化などにより、各々の大衆娯楽の空間にも新たな展開がみられる。本国際シンポジウムはこうした点に注目し、東アジアの「大衆」を享受者とする芸態を通じて、各々が享受対象とする「大衆」の実像とその提供・享受空間についての研究成果を集積・意見交換を行う。

京劇「十三妹」の主役何玉鳳に扮する李純蓮（李純蓮提供）

14 土

＜基調講演＞

石　婉舜（台湾・清華大学）
「知識人と近代台湾の大衆娯楽市場
―林摶秋の演劇、映画の軌跡を基に―」

＜発表＞

1) 劇場の作用

宮 信明（早稲田大学）
「ホール落語の定着と芸の変容
―六代目三遊亭円生の昭和 30 年代―」

徐 亜湘（台湾・台北芸術大学）
「小市民の高尚な娯楽
―孤島時期上海の緑宝劇場における話劇の上演（1938-1941）」

2) メディアを超えて

森平 崇文（神戸学院大学）
「ラジオと芸能―1950 年代上海を例に」

輪島 裕介（大阪大学）
「美空ひばりにおける「歌う時代劇スター」から
「座長」への転身とその文化産業史意義」

15 日

＜発表＞

3) 属性をめぐって

簡 秀珍（台湾・台北芸術大学）
「台湾乱弾戯閒西河の「番（少数民族）」
・漢人イメージと演出におけるジェンダー」

洪 栄林（韓国・延世大学）
「1950 年代以降の楽劇と映画の結合状況から
見るポストコロニアルと冷戦」

4) 大衆性をめぐって

中野 正昭（明治大学）
「筑紫美主子と佐賀にわか」

林 于竝（台湾・台北芸術大学）
「大衆演劇と日本演劇の戦後的な状況；
鈴木忠志の『シラノ』を例として」

細井 尚子（立教大学）
「『女優』と『女役者』
―初代水谷八重子から見る近代日本娯楽市場」

2019 年 12 月 14 日(土) 15 日(日) 9:30-17:00（両日）

立教大学 池袋キャンパス 5 号館 5221 教室

入場無料・申込不要
中国語逐次通訳あり

主 催：立教大学アジア地域研究所　立教 SFR 共同プロジェクト研究「『東アジア文化圏』研究基盤の構築―娯楽市場における「大衆」「演劇」「大衆演劇」から―」
共 催：東亜州大衆演劇研究会（台湾）

お問合せ／立教大学アジア地域研究所 Tel/Fax：03-3985-2581（月・火・木） e-mail：ajiken@rikkyo.ac.jp